らう。罪悪の與へる歡樂と云ふものは、實に短僅いもの、一瞬間に過ぎ去つて了ふ。後は心配と恐怖と良心の咎責とばかりである。

況んや自分が滅亡の原因となつた浮世の幸福だの、歡樂だのゝ儚さを見ては、猶更ら堪へ難く思ふであらう。「あゝ自分は何と云ふ馬鹿げ方をしたのである。一瞬間に過ぎ去つて了ふやうな儚い歡樂の爲に、靈魂も、天國も、天主迄も取失ひ、總ての人には見棄てられ、永遠に斯火の中に燒かれねばならぬことになつたよ！」と切齒して口惜しがるであらう。

あゝ天主よ、私は數限りなき聖恩の雨露に潤ひながら、浮世の儚い歡樂に曳かされて御身に背いたのであれば、既に〳〵地獄の底に

突落され、血の涙を飲んで狂ひ悶へて居る筈であつた。然るに御身は然う云ふ恐ろしい罰を降し給はなかつたのみならず、却て色々と私を勸め、戒め、威嚇して悔悛に導き下さつたのである。何と云ふ難有い御情であらう。如何したらば聖恩の萬一でも報ずることの出來よう。私は今より志を立直し、御身に背いたことを一心に悔み悲み、力の限りを盡して御身を愛せんと決心し奉る。

（三）、猛烈く惡人を噬み虐む蛆はこの二つに止らず、猶は彼等は僅少の骨折で地獄を遁れることと出來たのにと思ひ、悔しさの餘りに我と我身を搔さむしるのである。「あゝ自分は彼の恥辱を救して居たなら、彼の人目を憚り恐れる念を打破つて居たなら……彼の危い機會

に遠かつて居たなら……決して〳〵滅びはしなかつたらうに……」

「彼の交際を絶つに何の面倒いことがあつた。彼の忌々しい快樂を抑制へるに、彼の柄にもない慾望を打棄てるに何の難しい所があつた。たとひ如何に難しい所があるにしても、救靈を得るが爲には、萬事を犧牲にすべき筈ではなかつたか。而かも自分は其位の事を思ひ切る勇氣がなかつたので、斯う云ふ不憫な身の上となつた。今はもう是迄である。復如何ともすることは出來ない」。

「若し自分が秘蹟を屢々拜授つて居たなら、默想を毎日怠らなかつたなら、天主に不斷頼り縋つて居たなら、罪一つでも犯さなかつたらうに……自分は幾度も決心した。決心しても其決心を遂行はなかつた。時には遂行ひかけたが永續かなかつた。斯うして自分は終に滅亡んだのであるぞ」。

あゝ天主よ、私は一度ならず、二度ならず御身を愛せんと約束しながら、却て一度ならず、二度ならず御身に背いたのである。何の顏あつて尊前に進まれよう。唯だ御身が私を愛して、十字架にまで磔けられ給うたことを思ひ、これを頼りに敢て尊前に咫尺き、伏して痛悔の涙と主の愛の熱とを祈り奉る。主よ私は御身に背いて聖意を痛め參らしたことを一心に悔み悲み、今よりは心を傾け、身を盡して御身を愛せんと決心し奉る。然れども私は力極めて弱く、決心はしても、常に其決心を貫徹すことは出來ない。願くは聖寵を垂れ

て私を强め給へ。悪魔の誘惑に遭ふ度毎に、早速御身に駈け頼りて、御身の力ある御腕に縋り付くことを忘れざらしめ給へ。

あゝ罪人の寄托なる聖母よ、私の爲に御子に傳達ぎ、罪の赦免を乞求め給へ。

默想第二、救ることは容易かつたにと云ふ悲嘆、

(一)、地獄の悪人は、天主より添うしたる御光、御招、聖寵などを思ひ出したら、胸を抉ぐられる思がするであらう。

「あゝ自分は德を修めて聖人ともなり、終りなき福樂を享けるのは何の造作もなかつたのに、如何して斯う云ふ不幸な身とは成り果てた！」と、徒に悲しい懺悔をするのである。

殊に又、悪人が切齒して悔しがるのは、自ら好んで此滅亡を招いたよと云ふことである。「あゝ自分より愚なものがあらうか。彼等は血の涙を飲んで號泣ぶのである。自分を救はんとて、添くも全能の天主が十字架上に御生命までも犧げて下さつたでないか。幾度其の救ひの御手を差伸して自分を抱き上げて下さつた。ろれに自分は其の難有い御手を振り切つて、この火の中に飛び込んだのである。あゝ天國も喪つた、天主も失つた、自分は永遠に斯處に燒かれねばならぬ！」。

悪人の悲嘆は實に斯の如し、亦永遠に斯の如しであらう。

主よ、私は今日まで御身を蔑如にし、御身を疎じ申した大悪人で、

尊前に進出るにも堪へないのであるが、御憐を垂れて私を顧み給へ。最愛の救主よ、御身がゲッマニアの園に於て、私の罪の爲に覺悟給うた御悲痛の程を、私の心にも感ぜしめ給へ。私は限りもなく愛すべき御身を愛せずして、却て罪に罪を重ねて御身を苦め參らしたことを何よりも痛み悲み、偏に御赦を願ひ奉る。何卒私の罪を赦し給へ。一心に御身を愛せしめ給へ。私は誓つて御身を愛し、御身の外には何一つ愛しまいと決心し奉る。

(二)、茲に一個の病人があつて、非常な痛苦に悶へ惱めども、誰あつて同情を寄せて呉れるものもなく、却て樣々に詬り、辱め、其不品行を咎め、打つやら、踏むやら、蹴るやら、狼藉の有りだけを浴

びせかけると想像せよ。其病人の不憫さ加減、見るも涙の種子ではあるまいか。然れども地獄に罰された惡人は、之にも幾千倍勝つて慘酷く取扱はれる。有りと有ゆる峻刑酷罰に苦められても、誰一人「可哀相に！」と言を掛けて呉れるものさへないのである。

若し彼等が其の恐るべき火燄に燒かれながらも、正義に依つて罰し給ふ天主を愛することでも出來れば、責めてもの慰藉であらうが、早やそれすら叶はない。天主を限りもなく愛すべき御方と認めながら、之を憎み嫌はねばならぬのである。無上の善にて在す天主を愛することも出來ないと云ふのは、是れ實に地獄の地獄たる所以であらう。

猶又、現世に苦める善人の如く、責めて安かに天主の聖旨にでも托せて凌ぐことが出來たら、幾分の休安を覺ゆるであらうが、然し反對に、彼等は鞭に噬み附く蛇の如に、神の正義の笞に向つて螳螂の斧を振はうと猛り狂つて、却て苦痛を增すばかりである。

あゝ主耶蘇よ、私も地獄に墮落して居たらば、最早や御身を愛することと能はずして、永遠に憎み嫌はねばならぬ筈であつた。然し如何なる惡事を私に加へ給うたからとて、御身を憎み參らすべきであつたらう。御身は私を造り下さつた。自ら死んで私を贖ひ下さつた。特別の聖恩をさへ數限りもなく施し下さつた。惡事どころか始終斯う云ふ大恩を施し下さつたのである。之で如何して御身を憎まれよ

う。却て愛して、愛して、忘れもされぬほど愛すべきではあるまいか。主よ、聖旨の儘に私を罰し給へ。たゞ御身を愛するを得せしめ給へ。私は御身を愛し奉る。又何時迄も愛し奉るであらう。

(三)、今靈魂が始めて地獄に落込んだ時の心持を想像せよ。「あゝ自分は遂と罰されたのか！あゝ自分は遂と滅んだのか！」と悲げに泣き叫んで、万に一つでも禍殃を遁れる道はなからうかと捜し求めるであらうが、早や如何ともすべからざるを悟るであらう。

年を經、代を重ねること、海洋の水滴の數々、濱の眞砂の數々、山林の樹の葉の數々に及ぶとも、惡人の地獄は終ることなしであらう。彼等は責めて自ら己を欺いて、「この地獄も何時か終ることがあ

るかも知れぬ」と思ひ得たらば、幾分の氣慰にでもなるであらうが、如何んせん、地獄には、「かも知れぬ」と云ふ語はない。彼等は、己が間なく時なく凌ぎつゝある苦罰は、永遠にして窮りないのだと明に、又確に承知して居るのである。サテ〳〵人間ほど淺ましいものはない。地獄は斯う云ふ怖るべきものだと信じながら、如何して罪を犯すのを憚らないのであらう。

地獄の事は知つた上にも知つて、篤と考へて、幾度も默想して居ながら、猶は罪を犯して其所に落ち込んだ人は、殊更ら峻嚴しい苦罰を蒙らねばなるまい。

然らば時を移さず、直樣萬事を拋つて、主耶蘇に愛着することにしよう。地獄を遁れるか否かと云ふ一大問題でないか。何んぼう用心したとて、骨折つたとて、過分と云ふ氣遣はない。右の道理を深く心に刻み込んで、戰慄かねばならぬ。戰慄かないものは、救靈がないぞと覺悟せよ。

いかに愛すべき耶蘇よ、私の唯一の希望は、唯だ御身の御血と御死去との上に在るのである。他人は皆な私を見棄てゝも、御身さへ私と共に在したら、何の怖れる所があらう。私の罪が如何に重くても、痛悔さへすれば何時にても、赦を與へてやらうと思召して、私を御招き下さつたのであるから、未だ見棄て下さらぬ證據である。其上私が御身を愛したい心さへあれば、御身の方からは、聖寵でも

御愛情でも拒み給ふのでないから、私は唯だ御身に賴り縋り、一身を擧げて、御身の御哀憐に托し奉る。いかに我救主、我生命、財寶、愛にて在す耶蘇よ、私は從來、御身に浴びせかけ參らした亂暴狼藉を絕ゑず後悔し、力の限りを盡して御身を愛し奉りたい。主よ、私は今まで、御身に遠かつては居たが、今よりは決して〳〵御身を離れまい。御身を棄て、遠い罪惡の巷に騙落なぞしまいと決心し奉る。主の御望を私に命じ給へ、必ず聖旨を完うし奉るであらう。生きるも、死ぬも唯だ御身の聖寵の中に於てすることさへ出來たら、其他は如何樣にも取計らひ給へ。

罪人の依托なる聖母マリアよ、御蔭の下に私を護り給へ。復と御

子を失ふの不幸に陷らざらしめ給へ。アメン。

默想第三、天國の福樂。

(一)、現世の艱難辛苦を、屈せず、撓まず耐へ忍んだら、來世は如何に樂しからう。心配も、恐怖も、悲哀も、苦痛も、一度は必ず終るの日がある。救ることさへ出來たら、是等は却て歡喜の種となり、福樂の基ともなるであらう。主も曰うたでないか、「汝等憂ふべけれども、其憂は變りて喜となるべし」と。

今成聖の聖寵を有つて居る靈魂が、此涙の谷を去つて彼の樂しき天國に赴く有樣を想ひ見よ。既に天主の審判を受けて、天國に入るべき者と認められるや、守護の天使は來て其の救はれたのを慶び、

之を携へて白雲を攀ぢ、蒼穹を渡り、星辰を乗越ねて、美しき天の御國に往くと、諸の天使聖人等は彼を出迎へて、其の芽出度き凱旋を祝賀し給ふであらう。其の中には先立つた親兄弟、自分の爲に色々と心を碎いて下さつた保護の聖人等も見受けられるであらう。彼が其時の喜悦は、あゝ果して如何ばかりであらう。

然し天の元后たる聖母マリアの御顔を仰視た時の嬉さは、亦何物にか譬へられよう。恭しく其聖足に接吻して、一生の間に賜はつた數々の御恩惠を感謝すれば、聖母も亦彼を抱き起して、御子耶蘇の許に案内し給ふであらう。耶蘇は左も嬉しげに彼の手を執り、「あゝ汝來り喜べ、汝の涙を拭ひ去れ、悲哀の時は過ぎ去つた。いざ來つ

て我が貴い血を以て汝の爲に購ひ得たる玉の冠を戴け」と曰ひつゝ、彼を御父の尊前に導き給へば、御父は、之を抱き上げ、之を祝して、「汝の主君の喜に入れよ」とて、御自分と共に、天國の盡せぬ福樂を樂まして下さるであらう。

あゝ主耶蘇よ、私は今一心に御身を愛し、後でも引續いて、永遠無窮に御身を愛したいものである。主よ、私は御身を愛し奉る。唯だ御身をのみ愛し奉る。私を憐み給へ。御身を愛して、何時迄も渝らざらしめ給へ。

(二)、あゝ天國の福樂！天主が其の全能の御腕を奮つて、御自分の愛し給ふ僕の爲に備へ置かれた天國の福樂！我等は其の萬分の一で

も想像することと出來ないのである。

聖ベルナルドは曰つた、「天國には厭らしいものは一つもなくて、願はしいものは萬づ備はらぬと云ふことはない」と實に天國には厭らしいものは一つもない、我等の足が一たび天國の閾を越ゑると、凡百の災禍は一時に拭ふが如く消え失せるであらう。氣味惡い暗夜は消えて、心地よい晝は永久に晴れ渡り、肌を劈く冬の寒冷、金をも熔す夏の炎暑は過ぎ去つて、花咲き匂ふ長閑な春は永久に衰へないであらう。天國には、人に迫害められる憂もなく、嫉妬まれる氣遣もない。天國の聖人は互に相親み、相愛し、人の幸福を見ては、自分の幸福かの如に歡ぶのである。終に天國には疾病もなく、辛勞

もなく、貧苦もなければ、不自由もない。

天國には願はしいものが萬づ備はらぬと云ふことはない。目は天國の都の美觀に恍乎と見惚れて了ふであらう。あゝ實に彼所に住める天使聖人等の裝飾の美々しさよ。天の元后なる聖母マリアの麗しさは亦一入で、諸の星の光を奪つて獨り微笑む月の如しとでも謂ふべきであらうか。然し神の羔にて在す耶蘇基督の壯麗に比ぶれば、是とても月の前なる螢であらう。言ひ知れぬ妙香は馥郁として鼻を撲ち、美妙なる音樂と、神の光榮を歌へる天使聖人等の調奇しき聲とは、如何に樂しく耳に響くであらうか。

あゝ天主よ、私は罪に罪を重ねた惡人であれば、到底もく斯る

樂しい天の御國に入るに堪へない。然し御身の御死去の功德によつて、偏に之を望み奉る。

聖の御母マリアよ、御身は海の星にて在せば、私を導いて、難なく彼の天國の港に着くを得せしめ給へ。

(三)、然し是等の福樂は、成るほど樂しいには違ひないが、未だ之ばかりでは眞の福樂とするに足りない。天國の眞の福樂は天主を觀て、一心に愛し奉るに在るのである。萬善に滿ち、萬福に溢れて居なさる天主を面りに仰視て、全く己を忘れて、深く天主の中に沈み入り、天主と一致冥合して、力の限り天主を愛し奉る、あゝ之れ實に如何なる福樂であらうか。

天主を仰視ると共に、天主の底ひしられぬ御慈愛のほども悟るであらう。自分の爲に人となり、厩に生れ、十字架に磔けられて死し、聖体の中に食物となつて、自分を養ひ下さつた御愛を悟つて、如何に驚き入るであらうか。自分を悔悛に導き給ふた聖寵を數へ、自分を照らし、勸め、戒め、招き給ふた數限りなき聖恩を數へ見ては、坐ろに感涙に咽ぶであらう。艱難だの、貧困だの、病苦だの、自分が今まで災禍だと思つて居た所のものが、決して眞の災禍ではなくて、實に天主が自分を天國に引入れようとして、降し給ふた價貴き恩賜であつたよと分つては、餘りの難有さに身の措き所も忘れるほどであらう。況して自分より罪は少くても地獄に罰されて居る

靈魂等を、天國の山の絶頂より俯して臨視た時には、亦如何なる辭もて感謝の微意を表はすこと出來るであらう。

天國の福樂は實に斯の如し。百年でない、千年でない、天主が天主にて在す限り、何時迄も〳〵志は滿ち、望は足りて而かも飽くを知らず、歡喜溢れ、悅樂極まりて而かも竭きる所なしである。神の大慈悲の御腕に縋り、其の得ならぬ聖愛に醉ひ、其の温かい懷に抱かれて眠る。只だ思ひ遣るだけでも、恍然と我を忘れて、身は何時しか限りなき空のあなたに彷徨つて居る心持がする。

主よ、私は幾度も御身に背いたものであれば、今は尊前に咫尺るにも堪へないのである、況して天國の福樂なぞ夢にも望まれよう。

然し御身の限りなき御哀憐に賴つて、切に之を仰望み、天國の爲とあれば如何なる難難をも甘んじて耐へ忍ばんと決心し奉る。彼處に諸の天使聖人等は私を俟つて居られる。聖母マリアも双の手を擴げて私を俟つて居られる。御身も亦玉の冠を提げて私を麾いて居なさるのである。私は如何して腕うち擦り、足ふみ鳴らして奮ひ起たずに居られよう。

罪人の希望なる聖母マリアよ、私を扶け給へ。私が天國に昇つて御足の下に平伏すのを、見給ふ迄は、私の爲に祈るのを止め給ふな。あゝ聖母よ、私は深く御身に賴み奉る。私を憐み給へ、私の爲に傳達ぎ給へ。

第八日、耶蘇と聖母マリア、

默想第一、主耶蘇に對する忘恩。

(一)、あゝ主耶蘇よ、御胸に燃え立つて居た御愛情の炎は如何に激しかつたよ。私の罪を清めて、私を天の御國に導き給はんとて、見るさへ耻かしき十字架の磔柱の上に、御生命を犧牲に供へて下さつたのである。

「彼は自ら謙りて、死に至るまで、而かも十字架上の死に至るまで從へるものとなり給ひしなり」。實に神の御子は我等を深く愛し給ひ。我等の爲に死ぬのが御父の聖意であると悟り給ふや、飛び立つて之に從ひ、十字架上に死ぬ迄も謙り給うたのである。是を之れ

信じながら、爭で斯の愛情篤き天主を愛しないで居られよう。

世界中、何處を搜したとて、主人が生命を拋つて其僕婢を救ひ出し、國王が犧牲となつて其國民の生命を助けると云ふ例があらうぞ。たゞ主耶蘇は天地の王、萬物の君、全能の天主にて在しながら、卑しい、恩知らず奴なる我等の爲に死んで下さつたのである。奴隷に赦さうとして、己が身に赦し給はなかつた。此の拙ない我等に情をかけようとして、御自身には少しの情もかけ給はないで、十字架の上に、而かも恐ろしい痛苦の中に御生命を果されたのである。

あゝ主耶蘇よ、御身は御愛情のほどを私に覺らせようと思召して、斯る御痛苦を凌いで下さつたに、私は恩に報ゆるに仇を以てし、有

ゆる狼藉を御身に浴びせかけ參らしたのである。私を憐み給へ。御身を愛するを許し給へ。決して〳〵御身の愛に背くことなからしめ給へ。私は御身を愛し奉る。あゝ限りなき善にて在す主よ、私は御身を愛し奉る。何時迄も〳〵愛し奉るであらう。私の爲に凌いで下さつた御痛苦のほどを永く忘れず、何時でも、何處でも、御身を一心に愛すべき一大義務を背負つて居ることを忘れしめ給ふな。

(二)、如何にも不思議の至りではないか。多〳〵の人は、主耶蘇の御苦難を自分でも物語り、或は人の物語るのも聞きながらタワイもない小説、見ず聞かずの他人の死去でも聞くかの樣に、何等愛慕の情も、感謝の念も起さないと云ふは！。

あゝ人よ、汝、何故主耶蘇を愛しない。主は汝の愛を獲んが爲に、は、輕侮、凌辱、痛苦の淵に溺れて死し給うた上に、亦何をか成し得給うたであらう。

主耶蘇の凌がれたほどの痛苦をば、極めて卑賤しい乞食でも、汝の爲に凌いで呉れたら、汝いかで其乞食を愛して、感泣嗚謝しないであらう。

されど主よ、私は如何して他人を責めて、自分を責めないのである。私は今迄で如何なる感謝を御身に献げた。噫私は御身の愛に酬いようとはせずして、却て御身を輕じ、一方ならず聖意を痛め參らしたでないか。主よ、救し給へ。今よりは全く心を悛めて、御身を

愛し奉るであらう。大に愛し奉るであらう。斯ほどの御愛を忝うしながら、御身を厚く愛しなかつたら、ろれこそ憎みても足りない負恩奴と謂はねばなるまい。

(三)、サテも斯の苦痛の人、この十字架に磔けられて居られる御方は、之れ實に我等の天主に在すのであるぞ。今こゝに釘附けられて苦み給ふのも、死に給ふのも、唯だ我等を愛し給ふからで、他に故があつてゞはない。

十字架上の耶蘇は我等の天主に在して、唯だ我等の爲に死に給うたのであると信じながら、如何して斯耶蘇の外に一物たりとも愛することを得よう。

あゝカルワリオにて主耶蘇の御生命を燒き竭した美しき愛の火燄よ、來て私の内に潜んで居る浮世の情愛を燒き盡せ。私を愛して死んで下さつた、私の爲に一身を殘らず犧牲に供へて下さつた斯の最愛の主に對して、私も絶えず愛情の火に燃え立つを得さしてよ。

我等見た如き淺間しい人間を救はうとして、忝くも神の御子が十字架に釘付けられて死に給ふのを觀たる天使等は、果して如何なる感情を起されたであらう。

あゝ最も愛すべき救主よ、御身は御血も、御生命も私の爲には惜み給はなかつたのに、私ばかり如何して御身の爲に我心の愛情を惜まれよう。御身が私に要め給ふ所を、私は如何して謝絶ることの出

來よう。否や〳〵、御身は一身を擧げて私に與へて下さつた。私も我身を一切、殘らず御身に献げ奉る。

あゝ聖母よ、私を緊しく御子に愛着させて、何時迄も離れることなからしめ給へ。

默想第二、主の愛に酬ゆるに愛を以てせよ、

(一)、我等今謹んでカルワリオ山の頂を仰ぎ、我等の主耶蘇基督が十字架に磔けられて死に給ふ光景を眺望奉る。あゝ如何なる痛苦の淵に沈み入り給ふぞ。

いかに最愛の耶蘇よ、御身が十字架の上で斯くまで怖ろしい御懊惱・御痛苦を凌ぎ給ふのは、之れ實に私を殊の外愛し給ふからである。私に對する御愛情が薄かつたら、凌ぎ給ふ御苦惱も斯迄には至らなかつたであらう。

あゝ主耶蘇よ、十字架の上で、御身の上に落ち重なつた懊惱、痛苦、凌辱のはどは果して、如何ばかりである。尊い御躰は三本の釘もて吊り下げられ、御手は裂け、御足は破れ、御傷の上に息ちひ給ふ傷ましき狀態なるに、御身を取り卷く責人等は少しも心せず、却て樣々に罵詈り、嘲弄り、果ては怖ろしい瀆聖の言までも御身の上に雨らし參らすのである。然し御身の美はしき御靈魂は、御肉躰にも優りて、幾層倍激しき御悲痛に沈み給ふ。

「あゝ主耶蘇よ、如何なれば御身は斯程に痛み苦み給ふのである」。

「されば、斯苦も、斯痛も、汝を愛すればこそ甘んじて耐へ忍ぶのである。汝、我愛情の斯くまで熱烈しいのを想つて、我を愛せよ」。

わゝ主よ、私は御身を愛したい。私を愛して、死んで下さつた天主を愛せずして、亦何人をか愛しよう。イカニ我愛にて在す主よ、たとひ今迄は御身を輕じて居たにせよ、今は聖意を痛め參らしたのを一心と悔み悲み、有らん限りの力を傾けて御身を愛し、全く御身の有となり奉りたい。

主よ、私の罪を赦し給へ。私の心を緊く御身に結び附け給へ、御身の聖愛もて之を縛りつけ給へ、傷け給へ、燃し給へ。

(二)、主耶蘇は我等を愛するの情に驅られて、自から御手足を差伸べて十字架に釘附けられ、我等の爲に其の二つとなき御生命を父の天主に献げ給うたのである。

最も愛すべき救主よ、私を贖はんとて、御身が如何に貴い價を拂ひ下さつたかを思ふと、私は如何しても頼母しう思はずに居られない。私の罪が如何に重大く、其數が如何に夥多くとも、御身の償の價は更らに大きい。救靈の希望は露ばかりも失ふには及ばない。

あゝ我が唯一の信頼、唯一の愛にて在す耶蘇よ、私は今まで御身に背いた丈け今後は御身を愛したい。私は多く背いたから、亦多く愛したい。御身がこの願望を與へて下さつたから、之を完うする力を

も恵み給へ。

永遠の御父よ「汝のキリストの顔を顧み給へ」。然り、十字架上に死に給うた聖子を顧み給へ。其の蒼白たる御顔を、其の茨を冠れる御頭を、其の打貫かれ給へる御手足を、又其の裂け破れ給へる御躰を眄見給へ。是れ私の爲に屠られ給うた犧牲であるぞ。今謹んで之を御身に献げて、伏して御哀憐を祈り奉る。

いかに愛すべき耶蘇よ、御身の御苦難の功徳を御父に捧げて、私の爲に罪の赦免と、主の愛の熱とを求め給へ。あゝ主よ、私は如何しても御身を忘れること出來ないのである。御身が私の罪を贖ふが爲に、十字架上に苦み悶へて死に給うたのを仰視ながら、如何して

御身の外に一物たりとも愛することを出來よう。私の罪愆故に御身は斯る怖ろしい刑罰に處はれ給ふのだと思へば、餘りの悲痛に絶ゑ入る思がするのである。主よ、私を憐み給へ。私の罪を赦して、一心に御身を愛するを得せしめ給へ。

(三)、「彼は我等を愛し給ひ、御血を以て我等を潔め給へり」。主は實に我等の靈魂を洗ひ潔めんとて、其の價貴き御血を漓め竭し給うたのである。されば我等が善を修め、德を研くに就ては、決して過去の罪愆を憂ふるには及ばない。唯だ痛悔して心を悛めようと固く思定めさへすれば足りる。

十字架の上に苦みながらも、主は我等の事を懷ひ給ひて、今日ま

で我等に施し下さつた御哀憐、御恩寵は、既に其の十字架の上で用意し給うたのである。恰當我等一人宛の靈魂の外には救ふべき靈魂は無いものゝやうに、一心と我等を愛して下さつたのである。

いかに愛すべき耶蘇よ、御身は十字架の上より、私が一生の間に犯すべき罪愆を御覽じながら、誅罰をば備へずして、却て御光やら、慈愛溢れる御招やら、罪の御赦やらを備へ給うたのである。主よ私は斯る大恩を辱うしながら、如何して再び罪を犯して御身に背かれよう。決して〳〵其を許し給ふな。若し萬一御身の愛に忤る如きことでもあらうと見給はゞ、寧ろ今潔く死なしめ給へ。私は聖フランシスコサレジオと共に申上げ奉る、「愛しなければ死にたい、死な

なければ愛したい」と。

默想第三、聖母マリアに信頼め、

(一)、天主と人類との間に立つて、何吳れとなく周旋して下さるのは耶蘇基督であるが、其耶蘇基督と人類との仲を取持つて吳れるものは聖母マリアである。

聖人等の說によれば、天主から下さる聖恩は、悉く聖母の御手を以て分配られると云ふ。然らば天主に咫尺き、其聖恩の雨露に潤ひたいと思ふ人は、是非とも聖母に深く信頼まねばならぬ。

天主の尊前に於て、他の聖人等の祈禱は單に親しい友の祈禱に過ぎない。然れども聖母マリアの祈禱は卽ち母の祈禱である。子とし

て、母の正しい祈願を拒絶むことは出來まい。されば何時であつても、深く頼むの心を以て聖母に驅け寄りさへすれば、必ず聽届けられぬと云ふことはないのである。

マリアは天主の聖母として、非常に天主から愛されて居なさるから、隨つて其御權能も亦非常なものである。又一方からは我等の聖母でもあつて、殊のほか我等を愛しなさるから、始終我等の益を計つて下さる。

されば我等の身に取つては、聖母に遠かるより不幸はなく、聖母の御膝下に居るより幸福はない。何人にしても救靈を全うしようと思はゞ、兼々篤く聖母を敬愛し、其の忠實なる僕婢となり、其の慈

愛深き御腕に身を投掛けねばならぬのである。

あゝ聖母よ、御身に頼らずしては、救靈を得ることも出來ねば、災禍を遁れることも出來ない。御身の御手を經ずしては、如何なる聖寵でも與へられないのだから、私は一心と御身に信頼み、伏して御扶助を願ひ奉る。私は哀なる罪人で、幾度となく、御子を輕侮り凌辱めて、御身の聖意をも痛め參らした。然れども御身は哀憐の御母にて在せば、願望私を憐み給へ。私の爲に傳達いで、罪の赦免を請求め給へ。

(二)、主耶蘇は其本性より全能であるが。聖母マリアは聖寵によつて同じく全能である。聖母は卽ち御自分の力で萬事能ひ給ふと云ふ

譯ではないけれども、祈禱を以て何でも願ひ受けることが出來る。

假令如何ほど恐ろしい罪惡に汚れたものでも、聖母にかけ附けて、伏して其御哀憐を願つたら、聖母は直に御子の尊前に進んで、其の九箇月間宿り遊ばした御胎、其の幾年の間哺み給うた御乳房を示して、罪の赦免を願つて下さるであらう。御子も亦聖母の御賴に應じて、直ど御父に面謁して、御自分が罪人の爲に打貫かれ給うた御手足、刺透され給うた御脇腹を指しつゝ、彼の爲に御哀憐を願つて下さる。其傷跡を御覽じては、御父も流石に御子の祈願を拒むことは出來ないで、哀憐も、痛悔の恩も、罪の赦免の惠も、惡魔を防ぎ、罪の機會に遠かり、惡い癖を打破る聖寵までも、潤澤に與へて下さる

に相違ないのである。

されば何人であつても、聖寵が欲しければ、聖母に賴り縋らねばならぬ。惡魔の誘惑が恐ろしければ聖母に賴り縋らねばならぬ。罪惡の淵底より脫出ようと思はゞ、善より善に進み、德より德へ登ちうと望まば、是非とも聖母に賴り縋らねばならぬ。聖母は願ひの全能者、聖母に賴附けて救はれなかつたものとては、昔から今まで一人として見受けられない。

あゝ聖母よ、御哀憐を垂れて私を顧み給へ。御身は罪人の依托にて在せば、私を援け給へ。心より御足に縋り附く斯の哀なる罪人を見捨て給ふな。

（三）、聖母が斯う云ふ驚くべき權能を天主より賜はつたのは、御自分の爲と曰はんより、寧ろ我等の爲であつて、聖母は之に由つて我等を援助け、如何なる聖寵でも望に托せて乞受けて下さるのである。

我等は固より哀れなる罪人、聖恩を忝うするに堪へないのである。然れども眞實に罪を痛悔し、行を悛めようと云ふ決心がありさへすれば、聖母は必ず兩の腕を擴げて我等を抱き締め、罪科の傷はそれ〴〵に手當をして之を癒し、前にも倍して健全な身となして下さるであらう。聖母は實に哀憐の御母で、聖母に縋つて救はれないものもなく、聖母に縋らずして滅びないものもないのである。

されば我等は、心を盡して愈々益々聖母を尊敬愛慕して、其御鍾

愛を辱うするやう努めなければならぬ。

毎日コンタスを誦へる。毎土曜日には斷食する、或は責めて飲食を多少控目にする。聖母の祝日を熱心に行ふ。殊に重なる祝日は、之が準備として九日修行を勤め、九日前より何か特別に信心の勤を行ふ。朝夕天使祝詞を三遍宛誦へて、聖母の汚なき御孕を祝する。屢〻聖母の光榮を陳べた書を讀んだり、聖母の聖德を默想したり、聖母の事を人と互に語り合つたりする。其他如何なる場合にでも聖母に賴り縋り、其御助力を仰ぎ求める。

平生斯うして聖母を敬愛するの赤心を表す人は、一生涯安全にして世を渡り、殊に臨終の時には聖母の御慰藉を忝うし、終に天國

完徳の域に達したいと望む人の實踐ふべき徳行、

一、天主に對して、

一、日增に主耶蘇の愛に燃に立ちたいものと熱く望むべし。熱き望は鳥に於ける翼である。是あつてこそ靈魂は高く天主の方へ翔ることが出來る聖アロイジオが僅少の日數で非常の大徳に進まれたと云ふのは、其の天主を愛したい願望が非常に熱烈かつたからである。聖人は天主を充分に愛すること出來ないのを見て、熱い願望に燃にきれんばかりであつた。故に聖女マダレナ、デ、パーツは聖アロイジオを呼んで「愛の殉教者」と曰つた。

二、屢々耶蘇基督の御苦難を默想すべし。聖ボナウエンツラも被

に於て千代に八千代に聖母と其福樂を共にすると出來るであらう。慈愛の聖母にして亦唯一の頼なるマリアよ、私は罪悪に汚れたる身を持ちながら、御憐を頼にして御蔭の下に驅け倚り奉る。願くは私を排斥け給はず、斯の不憫な狀態に同情を寄せて、私を憐み給へ。罪の赦を乞求め給へ。あゝ聖母よ、私の罪悪を顧ずして、御身の盡せぬ御憐を思ひ給へ。私は一生涯、忠實に御子に奉仕へ、御身を一心に愛し、終に善き終を遂げて、天國の窮りなき福樂を蒙りたい。願くは御憐を垂れて私を顧み給へ。アメン。

仰つた如く、主耶蘇の御傷は、人の心を射貫いて、之に聖愛の火を燃やす火箭だと謂つても可いのである。

三、日に幾度も主耶蘇に對して愛情を發すべし、愛情もて目を醒ましし、愛情もて目を閉ぢよ。聖女テレジア曰はく、「愛情は我等の靈魂に心地よい主の愛の火を燃やす薪である」と。

四、絶えず主耶蘇に其の聖愛を願ふべし。聖フランシスコサレジオの言に依れば、天主を愛するの聖寵は、他の有ゆる聖寵をも含有んで居る。蓋し天主を誠意より愛する人は、其の嫌ひ給ふ所は何事によらず之を避けんと務め其の喜び給ふ所は亦何事によらず努めて之を行ふ筈である。されば何はさて措いて、第一に天主に願ふべきは斯聖寵であらう。

五、屢々聖体を拜領すべし。聖寵の地位に在つて聖体を拜領するのは、最も天主の喜び給ふ所である。元來愛するものと愛されるものとは同一になりたがるものである。主耶蘇は聖寵を保有て居る靈魂を、殊の外愛し給ふから、切りに之と一致したく思召し給ふ。して斯一致は聖体拜領に於てこそ始めて完全に行はれる。この秘蹟によつて主耶蘇は我等の靈魂と全く一致し給ふのである、「我肉を食し、我血を飲む人は我に止り、我も亦之に止る」、隨つて聖体拜領は天主耶蘇の聖意を喜ばせるものはない。だから敬虔に志す人は、一週に幾度となく、出來れば毎日でも聖体を拜領するのが可い。然し

其爲には必ず教導司祭の許可が要る。總て聖体拜領にまれ、制慾の業にまれ、自分獨斷に行るのは、敬虔を養へば可いが、却て驕慢心を盛ならしむる恐があるから、餘ほど注意せねばならぬ。但し聖体拜領や、制慾の業を行ふ許可は、始終教導司祭に嘆願せねばならぬ。教導司祭は、其人の望の多いと少いとによつて、多く許すこともあれば、少く許すこともあるから。

六、日に幾度となく聖体の靈的拜領を爲すべし。

七、日に責めて一度は聖体を訪問ふべし。聖体の尊前に於ては、信仰を起し、感謝し、愛し、痛悔したる上に、終まで聖寵を保全つの恩寵と、熱烈しい聖愛の情とを一心に祈願ふべし。

八、心の擾亂だの、失敗だの、恥辱だの、其他すべて不愉快な運命に出遭した時、責めて聖堂附近の人は、直に聖体に驅け賴ることを忘れてはならぬ。

九、毎朝、目が醒むれば、一身を天主に献げて、其日に天主の聖手より下與るべき十字架は、すべて恭しく推し戴き好ましからぬ事でも安んじて耐忍ぶの覺悟がなくてはならぬ。「御旨の行はれんことを」とか、「主よ御旨の何時も行はれんことを」とか云ふ語は、聖人等の、兼々口癖にして居られた所である。

十、天主の限りなく福樂に在すことを此上なく喜ぶべし。我等も天主を我身にも超えて愛するならば、自分一個の福樂よりも、天

主の福樂に在すことを一層滿足に思ふべきではあるまいか。

十一、生きて天主を喪ふ恐あらんよりは、寧ろ死んで天國に昇り力のあらん限り、萬代までも天主を愛したいと希ふべし。

十二、耶蘇基督の我等を愛し給ふこと、我等が耶蘇基督を愛すべきこと等を、屢々人と語りあふべし。

十三、天主の御爲とあれば、決して骨惜みをしてはならぬ。天主の聖旨に適ふことゝ悟つた以上は、何一つ辭謝んではならぬ。

十四、天下の人々が主耶蘇を愛し奉るやう望み、且つ努むべし。

十五、絕えず煉獄の靈魂と、憐なる罪人の爲に祈るべし。

十六、天主より以外の事物に對する情愛を解脫つべし。

十七、聖人等、特に聖母マリアに依賴んで、天主の愛を求むべし。

十八、天主の聖意を喜ばせ參らすが爲に、聖母を尊敬すべし。

十九、業を始める前には「主よ、全く主の御爲に」と日ひつゝ、何事によらず主耶蘇の聖意を喜ばせ參らさうと云ふ目的を以てのみ爲ねばならぬ。

二、自己に對して、

一、罪と云ふ罪は如何に小さな罪でも、識りつゝ犯さんよりは、寧ろ千度も死なうと云ふ決心がなくてはならぬ。

二、たとひ罪でないにせよ、身の快樂となる事は、少くも日に二度か三度は、制慾の志で之を犧げるが可い。

三、浮世の財寶、榮譽、歡樂等に就て人の語るのを聞く毎に、是等は皆な一度は終あるべきものだと思ひ、直に心を天主に上げて、「主よ、私は唯だ御身を望み奉る。御身の外に、何一つ望む所なしである」と申さねばならぬ。

四、毎日、半時間か少くも十五分間、默想すべし。

五、外部の制慾は、許可さへあれば之を實行ふべし。然し內部の制慾に殊更ら力を用ひよ。例へば好奇の心を抑へて見たい物を見ない、辱められても口答しない、物を言ひたいのに口を噤ぶ等、すべて我身の慾望に抗はうと務むべし。

六、敬虔の勤を行ふ時は、「是が仕收めだ」と思つてする。特に默

想中には屢々死の事を觀念し、床に就く時も「自分も一度は此床で死ぬのだ」と思ふべし。

七、敬虔の勤にせよ、其他の善業にせよ、如何に趣味を感じなくても決して怠つてはならぬ。始め少し怠ると、終には全く打止めて了ふかも知れぬ。

八、人に見られようと思つて如何なる善事でも爲てはならぬ。又人目を憚つて如何なる善業でも止めてはならぬ。

九、病に罹つた時は、醫師だの、僕婢だの、看護人だのの不行屆を苦情くべからず。却てなるべく苦痛を推隱して、じつと堪へるだけの勇氣がなくてはならぬ。

十、騒がしい人中に遠かり、沈默を守り、心靜に天主とさし向つて物語るべし。隨つて浮世の交際は成るだけ避けるが可い。

十一、如何なる難題が頻びかゝつて來ても、心を取擾すべからず。何時見ても愛嬌タップリとして、決して憂の雲を額に浮べてはならぬ。天主の望み給ふ所を望んでさへ行けば、何一つ悲しい事のあるべき筈があらうか。

十二、熱心なる人の祈禱を賴むべし。

十三、誘惑に遭つたら、深く賴むの心を以て、速に耶蘇マリアと呼ぶべし、誘惑の止む迄は、この尊名を呼ぶのを止めてはならぬ。

十四、耶蘇の御苦難と、聖母の御傳達とに深く信賴むべし。又毎

日この信賴の恩惠を天主に願ふべし。

十五、過失に落ちても、決して心を擾したり、失望したりしてはならぬ、たとひ幾度同じ過失を反覆すことあつても……たゞ速に痛悔し天主の御力に賴つて、心を改める決心を固むべし。

三、他人に對して、

一、惡に酬ゆるに善を以てせよ。責めて害を加へた人の爲に祈れ。

二、言語、或は動作もて恥辱を加へる人にも、溫和しく返答して己の人の心を和げようと務むべし。然し心が亂れ騒いで居る時は、靜まる迄は、默る方が可い。左もなくば、思はず知らず數多の過失を重ぬるものである。

三、人を咎めるにしても時を見ねばならぬ。咎める人も、咎められる人も心が擾れて居る時などは、尤も注意すべきである。斯る時は説諭しても、りの説諭が益にならないのみならず、却て害になるばかりである。

四、人の事は成るべく善い樣に見直し、聞直し、其の行動が如何しても辨解されない時は、責めて其意向を辨解してやらねばならぬ。

五、出來るだけ他人を援くべし。仇敵であれば、猶更ら援けてやらねばならぬ。

六、天上の光榮に關はる時の外は、決して人の好かない事を言つてもならぬ、爲てもならぬ。若し友愛を破る如な事でも仕出かした

ら、直に赦を請ふべし。少くも其人に向つて、一層柔和に談話なすべし。

七、談話は成るべく低音で、温しくすべし。

八、輕侮、凌辱を受けた時は、ツと堪へて之を天主に献げ、決して人の前に出て恨みを言つてならぬ。

九、教導司祭より與へられた日々の要務の規則は、必ず正確に之を遵奉るべし。

十、長上を視ること、主耶蘇基督を視るが如くせよ。

十一、卑賤しい職務を却て喜ぶべし。

十二、自分の爲には、成るべく粗末な品を選るべし。

十三、長上の命令とあれば、口答せず、不承〳〵の顏色をせず、直に飛び立つて從ふべし。我身の名譽だとか、快樂だとかは、決して冀つてはならぬ。

十四、我身に就ては、善くも惡くも言はぬが可い、己を惡く言做すのは、度々驕慢心を煽り立つる原と爲る事がある。

十五、少者に對しても謙遜の念を失うてはならぬ。

十六、人に咎められるか、無實の罪を負はされるかしても、決して辨解してならぬ。たゞ默つて居ては人の爲に躓となるか、或は公衆の害になると見る時は、靜に其譯を申述ぶべし。

十七、病人、中にも人に棄てられて、寄るべなき病人を勞はり救

くべし。

四、雜、

一、身を聖ならしめようと思はゞ、苦を凌がねばならぬ、天主の聖意を喜ばせようと望まば、我志望を絶ちて、天主の思召を行はねばならぬ、と云ふことを暫くも忘るべからず。

二、完德の域に達したいと云ふ決心を始終温めて、假令ひ如何なる冷淡に陷つても、夢々力を落してはならぬ。

三、毎日完德に進まんとの決心を新にすべし。

四、修道者は、毎日、ろの誓願を新むべし。

五、天主の聖意に善く適ふが爲には、何事に就ても其思召に身を

委ね、痛苦であらうが、疾病であらうが、輕侮、凌辱であらうが、失敗でも、他人の反對でも、親戚朋友の死亡でも、すべて我身に快からぬ事を、毎朝々々天主の御手より受取つて、喜び勇んで之を耐忍ばねばならぬ。困難は廉價の市場である。聖人等は孰れも斯市場に入つてころ、多くの功績を買ひ集められた。

何事によらず、總て天主の聖意に身を委せ奉るのは、大に天主の光榮ともなることで、聖人等は最も斯に力を致された。毎朝の默想も之を第一の目的とせねばならぬ。聖女テレジアは曰つた、「默想中には成るべく天主の思召に自分の志望を合せるやう務ねばならぬ。完德の高い域は實に斯に在るのだと、固く信じて疑ふべからず」と。

然らば、我等は默想をするにも、祈禱をするにも、ミサ聖祭を拜聽するにも、之を唯一の目的とし、繰り返し〳〵斯聖恩を願はねばならぬ。「主よ、私に敎へて聖旨を行はしめ給へ」とか、「主よ、私が何を爲るのを望み給ふか」とか、「主よ、私は何事によらず御身に從ひ奉るであらう、主よ、聖旨は何時も行はれ給へ」とか云ふ祈禱は、聖人等の絶えず口にし給うた所である。

然し、天主の思召に身を委せると云ふ中にも、自分の不愉快と覺ゆる事に於てゞあれば、最も價値がある。アビラの福者ヨハネは曰つた、「逆境に在つて一度『主の聖名は祝せられ給へ』と叫ぶのは、順境にあつて、千度、感謝するにも優つて居る」と。して天主の聖

旨に身を托せるのは、唯だ天主から直接に來る災禍に於てばかりでない。猶ほ天主が人手を借つて我等に降し給ふ所の誹謗だとか、讒言だとか、盜難だとか、凌辱だとかに於ても同じである。「吉も、凶も總て天主よりぞ來る」と聖書にもある如く、何事も皆な天主の御手より來るのである。固より天主は我等に害を加へる人の罪は望み給ふまいが、其罪の爲に我等が卑められ、苦められるのを望み給ふ。抑も艱難だの、災禍だの云ふものは、忍耐の心なくして背負つたら、本當に艱難であり、災禍であるが、天主の思召だと甘んじて抱締めると、却て幸福となり、歡喜となり、天國の王冠を求める價値とも、なるであらう。

要するに天主の聖旨に絶ゑず身を委せる信者は、容易に完德の域に進み、現世ながらに盡せぬ平和を樂むことと出來るであらう。

六、聖母マリアを特別に深く敬愛し、人にも勸めて敬愛せしむべし。聖母に深く信賴むの心を有つて居る人は、ろれこそ救靈の最も確實な保證を得て居るのだから、一方ならぬ天主の聖恩だと思ひ、厚く感謝すべし。この心を有たない人は頻りに天主に祈り求むべし。

基督信者の四大紀念日、

紀念日を祝ふに就ての心得、

何か特別に異つた聖恩を忝うした日は、一生涯紀念日として之を忘れず、其聖恩を篤く天主に感謝すると共に、其日に湧き出た所の

美しい感情だの、立派な決心だのを新にするのは、靈生上に少からぬ利益がある。殊に洗禮、初聖体、堅振、婚姻の聖恩は、基督信者の暫時でも忘れてならぬ所であるから、毎年、特別の熟心を以て、其紀念日を祝ふことにせねばならぬ。

紀念日を祝ふには、豫め告白をして心を潔め、前晩より「聖靈の降臨を望む祈」を誦へ、翌朝の默想を準備し、心靜に明日の紀念祭を觀想へつゝ眠に就くべし。

朝の祈禱の後、自分の戴いた聖恩に就て暫く默想を爲し、其聖恩の寶を善く利用はなかつた所は、伏して赦を願ひ、決心を新にし、聖寵を祈り求むべし。

斯日、ミサを拜聽し、聖体を拜領する時は勿論、コンタスを誦へ、聖体訪問をする時にでも、必ず左の三つを忘れてならぬ。即ち、

一、受けたる聖恩を感謝すること。

二、斯聖恩を蒙るに就て、自分を援助けて呉れた人の爲に祈ること。

三、今まで斯聖恩に負いて罪を重ねたことを痛悔し、因て新しい決心をすること。

一、洗禮の紀念日（明治 靈名）年　月　日

默　想

（一）、自分は洗禮の秘蹟によつて、元罪、自罪、其償までも赦さ

れ、靈魂上全く生れ變つて、新らしい人となることが出來たのである。

是迄は罪人であり、天主の敵であり、惡魔の奴隷であり、地獄に罰されて終りなく苦むべき者であつたのが、一たび洗禮を授かると、罪人は却て義人となり、天主の敵は却て其愛子となつて、天國の家督を相續するの權利を享け、惡魔の奴隷は却て耶蘇基督の弟妹、聖靈の殿堂となり、地獄に處罰されて、惡魔惡人等と共に終りなく苦むべき者であつたのが、今は却て天國に昇つて、天使聖人等と共に天主を面りに仰視て、千代に八千代に歡樂むべき身分に引上げて戴いたのである。

何ど難有い聖恩ではあるまいか。憐れな、見すぼらしい乞食が世界の大王と推立てられたと云つても、之には遙に及ばないであらう。罪惡の中に孕され、怒の子として產み落された自分も、一朝、洗禮の水が額に流れるや否や、忽ち斯う云ふ幸福な身分に成り變つたのである。あゝ自分は何を以て、斯大恩に酬い奉ることの出來よう。唯だ感謝の涙に咽びつゝ、主の尊前に拜伏すより外ないのである。

(二)、洗禮の聖恩は實に太したものである。隨つてそれより生ずる責任も亦ナカ〳〵重い。

自分は洗禮によつて天主の子となつた以上は、亦天主を父として敬愛し、何事によらず其聖旨を奉戴いて行かねばならぬ。天主の

子の位と云ふは、世界に駢びない尊貴いものであるから、之を何よりも貴重し、夢にも己が身分に不似合な行爲を仕出かして、其位を辱しめ、天主に不孝を働いてはならないのである。然るに自分は今まで如何であつた。

基督の弟妹となつた以上は、成るべく基督に近似らねばならぬ。基督の思想を以て自分の思想とし、基督の言語を以て自分の言語とし、基督の動作は直に自分の動作となり、其の貴重し給ふ所は自分も之を貴重し其の輕視し給ふ所は自分も之を輕視し、其の愛し給ふ所を愛し、其の嫌ひ給ふ所を嫌ひ、全く基督の生寫しとも謂はれる位にならなければならぬ。縱し洗禮は授つても、縱し己は基督の弟

妹よと意張つても、平素の言語動作が基督の言語動作とは似よつて居ないで、寧ろ惡魔のに近似い樣では、ろれころ名あつて實なき似非弟妹であらう。然るに自分は今まで如何であつた。

聖靈の殿堂となつて、祈禱だの、聖油だの、魔祓ひの式だのを以て祝聖められたからは、自分の身はもう實に神聖いものである。何時迄も淸淨潔白に之を保存つて行かねばならぬ。良からぬ思想、褻らはしい言語、耻かしい行爲を以て、之を聊にても瀆すが如きは、聖靈に對して輕からぬ罪であらう。然るに自分は今まで果して如何であつた。

終に惡魔の奴隷より贖はれて、聖會の温かい懷に抱き入れられ、

天國の盡せぬ家督を相續すべき權利までも享けた身分でないか。それに如何して今迄は浮世の儚い榮譽や、夢のやうな快樂やに曳かされて、斯う云ふ大きな權利を拋棄て顧もしなかつたのであらう。

今一心と悔み悲み、自分の品位の高く、尊く、決して世の人並でないと云ふことを考へ、以後は如何樣の事があつても、斯品位を辱めない樣、心の帶を引締めねばならぬ。

(三)、洗禮を授かる時、自分は代父の口を以て、惡魔と其所業、其榮華までも全く棄てると約束したのであるが、サテ此約束を忠實に守つたであらうか。

惡魔を棄てると約束したものが。惡魔と全く手を斷ることを能きな

いで、却て惡魔の誘惑に喜んで耳を傷けたことないか。却て惡魔と父子の緣を結び、主從の契を重ねたことないか。却て惡魔の手先となつて、他人を惡の道へ引込んだことないか。

惡魔の所業を棄てると約束はしたものゝ、甘じて惡魔の奴隸となり、其の勸める儘に、有ゆる罪惡に身を持崩したことないか。

惡魔の榮華を棄ると口では立派に約束した。然れども心は却て浮世の財寶だの、榮譽だの、歡樂だのに頓じ入り、只管目を喜ばせよう、耳を樂ませよう、身を飾らう、愉快をしようとばかり考へては居なかつたらうか。

基督は浮世を詛ひ給うた、「我は浮世のものでない。我は浮世の爲

に祈らない。浮世は禍なる哉」などゝ有ゆる詛を浮世の上に雨らし給うた。それに「己は基督信者で御座るの」、「惡魔の榮華を棄てたもので御座るの」と偉がつて居ながら、基督の詛ひ給ふ所を詛ひもきらず、却て一心と之に憧憬れて居るではないか。何處に浮世を棄て、惡魔と手を斷つた證跡が仄見ゐる。

洗禮を授かつた時、自分は頭に白布を冠され、手には蠟燭を持されて「今より後、身には雪を欺く聖寵の白衣を纏ひ、心には信望愛の火を燃やしつゝ、主の審判の日を俟たねばならぬ」と諭されたのである。然るに是迄と云ふものは、幾度か其の聖寵の白衣を脱ぎ棄て、其の信望愛の火を吹き消して了うやか知れぬ。若し然う云ふ時

分にでも、突然主の審判の公庭に召喚されて居たなら、如何なる宣告を受くべき筈であつたらう。

……

今日、聖体拜領後、洗禮臺の前に跪き、燃ゆるが如き信德の眼で之を打眺めつゝ、「自分は幾年前に、此處で、惡魔の奴隷たるを免れ、天主の愛子となり、天國の家督相續者と定められたのである」と觀想へて見るが可い。して斯大恩を篤く天主に感謝し、洗禮の約束を思出しては、幾度となく之を破つたことを悔み悲み、再び斯る過失に陷らんより、寧ろ今、茲で死するに若かずと決心しつゝ、「洗禮の約束を尋ぎて新にする祈禱」を恭しく誦ふべし。

二、初聖体の紀念日（明治　年　月　日）

默想

（一）、あゝ初聖体の日！主耶蘇が初めて自分の胸に天降り下さつた初聖体の日！あゝ彼の初聖体の日の嬉しさ！今思ひ出しても心動き情躍り、眼は何時しか時ならぬ涙の露に濕ふのである。

彼の日こそ、主が初めて自分の胸に這入り下さつた日である。御自身の御肉、御血、御靈魂、天主の御性迄も自分に與へて下さつた日である。謂はゞ自分の靈魂に初めて其の愛情の籠つた御唇を當て、平和の接吻をして下さつた、初めて其の優しい御手を伸べて、自分を撫でさすつて下さつた、其の溫かい御胸に自分を抱きしめて

下さつた日なのである。

あゝ彼の日に、天使等は如何に驚きの眼を睜つて自分を眺め、自分の境遇を羨ましく思つたであらう。あゝ彼の日に、群衆は如何に喜ばしい聲を絞つて天主を讃美し、「主を宿せる胎は幸福なるかな」と絶叫んだであらう。彼の日には、父母も多年養育の辛苦を忘れて、飛び立つばかりに喜ばれた。彼の日には、活々たる信仰、燃ゆるが如き希望、沸返へる愛情に、自分はもう後を忘れ、前を思はず、唯だ〳〵現在の幸福を樂んだ。恰當天國が自分の爲に其儘現世に天降つたかの樣に覺えたのである。

司祭の熱心なる說敎、父母の嬉し涙、被つた白布、戴いた花冠

手に持つた蠟燭、洗禮の約束を新めたる、聖母マリアに身を捧げたる等、自分は一生涯、如何しても忘れること出來ないのである。

今主の尊前に拜伏して、初聖体の聖恩を深く感謝し、併せて彼の日に定めた決心を喚起して見ねばならぬ。

(二)抑も主が初聖体の日より引續いて、幾度となく自分の心に來て下さつたのは何の爲であるかと云ふに、他ではない、唯だ自分と全く一致して、一つ脉、一つ心となるが爲である。主自らが御父に由つて活き給ふが如く、我身をも御身に由つて活かして下さらんが爲である。自分の靈魂を養ひ、其力を强め、其創痍を癒し、其の微少の汚點までも洗ひ清めて全く新にし、御身と共に、永遠無窮に樂

むを得させんが爲である。何と云ふ難有い思召であらう。

されば若し自分が善く〳〵準備して、屢々、熱心に斯聖体を拜領つたならば、主の神聖い精神、其の奇しき感情、美はしき傾向は、次第々々に自分の心に泌み渡り、終に自分は全然主に同化されて了つて、殆んど一個の小基督ともなることが出來るのである。

然うなると、心は情慾の絆を解放されて全く自由となり、現世の傷い事物には一切眼もくれないで、我と我身を打忘れて、主の聖心の中に云ひ知れぬ平和を樂むことが出來る、否な自分と云ふものは、全然消に失せて了つて、唯だ主獨り自分の内に活き給ふことになるのである。

所が自分は今まで斯る利益を得たであらうか、怠慢にして、斯秘蹟に近接かうともしなかつたことはなからうか。治療して戴くべき創痍もなければ、洗つて貰ふべき汚點もなく、誘惑を防ぐ力、德を修める聖寵、自分には一つも要らないものゝ樣に、幾久しくこの秘蹟に遠かつて居たでないか。たとひ然うまではなくても、平生、不熱心で、冷淡で、少しの準備もなしに斯秘蹟に近接くものだから、何の利益も享けること出來ず、殆ど斯の貴い秘蹟を無益にして居る觀である。今伏じて其赦を願はねばならぬ。

(三)、あゝ初聖体當時の熱心、其の無邪氣ない喜悅、其の燃ゆるが如き感情を以て來て、之を今の冷淡、不熱心に比べたら、如何して

面を赧めずに居られよう。其時は尙た小童であつた、今はもう大人である。其時は初めて斯聖体を拜領したのであつた、今は幾十百遍と數を重ねて居る。されに今は却て信仰の火は衰へ、愛の熱は冷ゑきり、拜領前の準備も、拜領後の感謝も間に合せにして居るでないか。

實に習慣より恐ろしいものはない。斯う云ふ貴い秘蹟迄も、習慣になると、狎れ褻して、何とも思はなくなつたのであるか。

是と云ふのも、自分が平生默想だの、黙的讀書だの、聖体訪問だの、拜領前後の要務だのを怠つて、信仰も養はず、愛情も温めなかつた結果であるに相違ない。

主よ、私は初聖体の日に、洗禮の約束を新め、聖母マリアに身を捧げて、今よりは、悪に遠かり、善に親み、御身と同じ心、同じ姿になつて、聖母の愛子の中に加はらうと決心したに拘はらず、今迄は少しも此決心をば守らなかつた。今一心と痛悔して赦を請ひ、茲に再び其日の決心を新め奉る。主よ、願くは聖寵を以て此決心を固め、死する迄渝らさらしめ給へ。

三、堅振の紀念日　明治　年　月　日

聖名

默想

(一)、幾年前の事であらうか、自分は多くの人々と共に祭壇の下

に、司教閣下の前に跪いて堅振の秘蹟を授かつたのである。其時、閣下は自分の上に手を掩うて聖靈の賜を祈り求め、次に聖香油を以て額に十字架を印して下さつた。

抑も聖香油と申すのは、橄欖の油にバルザムと云ふ香物を混ぜて祝別したもので、色々と深い意味を有つて居る。油は物を強め、且つ軟和げるものであるが、人も堅振の秘蹟を授かつたならば、心は聖靈によつて強められ、悪魔と勇ましく戰べるやうになると共に、日頃堅苦しう、六ケ敷う感ずる所の信者の要務も、軟和かく、行ひ易く覺えて來ると云ふことを表すのである。

バルザムは、腐敗を防止める力がある上に、床しい香を放つもの

である。人も堅振の聖寵を以て罪悪の腐敗を防止めて貰ふのだから、腐敗つた世の中におりながら、却て馥郁たる善徳の香を放たねばならぬ。聖ポーロの所謂「基督の馨はしき香」とならねばならぬと云ふ意味なのである。

額に十字架を印すのは、十字架は基督信者の旗印で、之を一番善く見える額に塗るのだから、信者たる者は主基督の聖教を恥ぢないで、何時でも、何處でも之を公に表はして行くべきものだと教へる爲である。

終に此聖教の爲とあれば、如何なる反抗でも、如何なる災禍、痛苦でも喜んで耐へ忍ばねばならぬ。然うしてこそ眞の平和が得られ

るのだと諭さんが爲に、閣下は本人の頰を輕く打つて、「汝に平和あれ」と曰つて下さる。

自分は今斯う云ふ鴻大さな聖恩を忝うした當時の光景を思ひ廻して、感謝の涙を禁め得ないのである。あゝ思へば〳〵主の御親切の難有さよ、心も言葉も如何して及ぶ所であらうか。洗禮に由つて自分は新に聖寵の生命を與へられて天主の愛子となり、初聖体を以て乳離をし、堅振の秘蹟を授かつては、もう成長して一人前の信者となり、救靈の敵に向つて、花々しく戰ふべき軍人と迄して戴いたでないか。

(二)、昔の人も曰つた如く、現世は戰の場であつて、夫の悪むべき

悪魔の奴は、始終内からは情慾の火を煽り立て、外からは世俗の汚濁を投げかけて、我等の靈魂を罪悪のドン底に突き落さうとするのである。殊に未だ若やかな青春の血の沸つて、經驗もなく、前後の思慮もない時には、最も其攻撃が猛烈しいので、之に當るには如何しても特別の聖寵が必要である。で、聖靈は堅振の秘蹟を以て、躬ら我等の心に光臨で遊ばして、我等の爲に光の天主、力の天主、愛の天主となつて、豐に其賜の雨露を惠んで下さるのである。

先づ聖靈は光の天主である。叡智の賜を以て人の心を照らし、現世の財寶、榮譽の儚くして、天國の幸福の窮りなきこと等、すべて物の眞の價値を悟らして下さる。明達の賜を以て、聖教の奥義を理

解らせ、超見を以ては、殊更ら困難なる場合だとか、天主の聖意に適ひ、救靈を得んが爲に、何の道から進んだら可いのやら心が惑つて居ると云ふ時に、其判斷を誤らないやう嚮導いて下さる。智識を以ては、人の心より迷妄の雲を打拂ひ、惡を避け、善を修めて、救靈を全うするの道、所謂聖人の學を授けて下さる。だから其訓導に從つてさへ居たら、一歩でも邪路に蹈み迷ふ氣遣はないのである。

次に聖靈は力の天主である。なるほど今は太平の世で、猛火の海に入り、白刃の林を蹈むの憂はない。然れども公教會とし云へば、昔も今も内には不熱心の信者あり、外には異端異教の輩があつて、少しでも熱信家と見るや、直に其信仰を攻撃し、其敬虔を嘲笑ひ、

毒言を吐き散らし、悪罵を投げつけて止まないから、之を推破つて信者の要務を全うすると云ふは容易な骨折でない。今日幾多の信者が教會に近かず、秘蹟に遠かり、冷淡不熱心に流れて居るのも、十中八九は、人目を憚り、風評を懼れる爲である。其で聖靈が信者の心を強めて、悪魔の欺瞞だの、情慾の誘惑だの、浮世の威嚇だのも懼れないで、唯だ〳〵罪を怖れ、天主を畏れる樣にと、剛毅や敬畏やの賜を與へて下さるのである。

終に聖靈は愛の天主である。孝愛の賜を以て信者の心に愛の火を燃やして、天主を万事に超ゑて愛さして下さる。一たび此愛の熱に温つたものなら、怡當孝行の子女が其の愛する父母に對するが如

く、飛び立つて天主の命に從ひ、夜晝天主の事を懷ひ、屢々天主と蜜の如な談話を交へ、天主が人に背かれ、輕侮られ給ふのを見ては、身を切られる思がして、如何にかして其聖意を慰めて上げたいものと一心に冀ひ、天主の爲には、如何なる苦勞艱難でも喜んで堪へ忍ぶと云ふやうになるのである。

自分も堅振を授かつた時は、斯う云ふ立派な賜を戴いたのであるが、其結果は果して如何であつた。折角聖靈の赫々たる光に照されながら、尚は暗黑の所業を行つて居たでないか。聖靈の力を以て強められながら、戰ふ毎に悪魔に敗られ、守り易い掟さへも守らず、十字架を恥ぢ、艱難に得堪へず、罪悪に腐つて臭い〳〵香を放つて

居たでないか。聖靈の熱は溢れるばかりに戴きながら、只管浮世の財寶や歡樂や、榮譽やを慕ひ愛して、天主に孝愛を盡さうなんて思ひもしなかつたのである。今深く悔い悲んで、偏に赦を乞求めねばならぬ。

(三)、堅振の秘蹟を授かると、啻に聖靈の賜が與へられるのみならず、其賜の源にて在す聖靈が、忝くも我等の心を以て己が殿堂となし、躬ら茲に降つて住んで下さる。

抑も聖靈は常に火に象徴られ給ひ、使徒等の上にも、火の舌の形を以て天降り給うた。火と云ふものは恐ろしい威力のあるもので、一たび此が燃え狂うた日には、立ろに世界中でも灰になして了ふ位

である。使徒等が賤しい漁夫風情の身でありながら、全世界を一新するやうな大事業を遂げられたのも、畢竟聖靈の火に燃え立ち給うたからである。然し一方から、火はナカ〳〵消え易い。風にも消える、水にも消える。油が盡きても消える。今迄堅振を授かつた人で、冷淡に流れ、不熱心に陷り、救靈の道さへも蹈み外して居るものが少くないのは、ツマリ浮世の風に吹かれたり、情慾の水を注ぎ込んだり、祈禱や秘蹟やの油を供給へなかつたりしたからである。

されば自分は今より、成るべく罪の機會に近かず、悪しい友、危い場所に遠かつて、浮世の風を避け、五官を慎んで情慾の水を堰止めた上に、朝夕の祈禱、默想、ミサ聖祭、聖教の稽古、告白、聖体

の秘蹟等を以て、絶ゑず油を加へる決心である。

而して宮に聖靈の火を消さないのみならず、益々之を熾に燃して、自分が火の樣になつた上で、他人迄も燒き盡したい。一家、一村、一國の人々を殘らず燒き盡して、天主の民になしたいものである。

四、婚姻の紀念日（明治　年　月　日）

默想、

人は婚姻をした當時の心をさへ保持つて居たら、何時迄も面白い樂しい家庭を作つて行けるのだが、悲しい哉、多くの人は一二箇月も經つと、全然其時の心を失つて了ふものだから、色々と家庭に波風が生じ、夫婦間にもさ〻くが起つて、他人に後指さゝれる事に

なるのである。だから少くも毎年一度は婚姻の日を紀念して、夫婦共告白をし、聖体を拜領り、徐ろに其當時の感想を喚起し、自分等の双肩に負はされた夫婦の三大義務を觀想るのは、極めて必要であらうと思ふ。抑も夫婦の三大義務とは何であるか。

（一）、夫婦は相愛し相忍ばねばならぬ。結婚の朝、司祭の前、保證人の眼下で夫婦互に手を握つて、「今より夫は婦のもの、婦は夫のもの、二人にして實は一人である」と云ふ約束を取換はした。又ミサ聖祭の中にも、聖ポーロがエフェゾ人に送つた書簡の中から、左の如き文句が讀聽かされたのである。

「妻たるものは己が夫に從ふ事、主に於けるが如くすべし、其け夫

が妻の頭たる事、キリストが教會の頭に在せるが如くなればなり。されば教會のキリストに從ふが如く、妻も亦万事夫に從ふべし。夫たる者よ、汝等の妻を愛する事、キリストも教會を愛して、之が爲に己を付し給ひしが如くせよ……妻を愛する人は是れ己を愛する者なり。曾て如何なる人も己が肉身を嫌ひし事なく、却て之を養ひ守る……故に人は父母を措きて己が妻に添ひ、而して二人一體となるべし」。

斯の如く、婦たるものは夫を己が頭と敬ひ愛して、何事たりとも之に背いてはならぬ。假ひ夫にして夫たるの道を盡さゞるにせよ、己ば婦たるの道を怠つてはならぬのである。夫も亦婦を己が身の如く親

み愛し、其不足を耐へ、其缺點を忍容し、過失があれば懇ろに說き諭し、夢にも口汚く罵詈つたり、手荒らく打叩いたりしてはならぬ。婦は夫を扶けて世を渡り、救靈を全うするが爲に天主より與へられた途伴であつて、決して夫の婢妾ではない。

斯うして互に敬ひ愛し、一つ体、一つ心ともなつてこそ始めて幸福圓滿な家庭が作れるのである。敬もない、愛情もない家庭は、それこそ惡魔と惡魔を結合せたのも同樣、之より憐れなものはあるまい。

夫婦相愛しなければ相忍ぶことも出來るものでない。遠くより望めば世に又なく美はしう仰がれる富士の山でも、登つて見れば、こ

ろ〳〵した燒石の山に過ぎないが如く、如何に滿幅の愛を傾けて戀ひ慕つて居た男女にしても、夫婦となつて見れば不足だらけで、末永く之と家を同うし、閨を共にして行くと云ふはナカ〳〵の事でない、搗て加へて嫁いだ先には舅姑が居る。小舅小姑も居る。事毎に難癖を附けて虐待られる事もあらう。假令それが無いにした所で、永い間には思はぬ災難に罹ることもないかも知れぬ。不治の病に侵されることもなきにしも限らぬ。其他、家を治め、子女を育て、隣近所とも事無く交際つて行くには、人の知らぬ心配もしなければならぬ。互に敬と愛とを以て結ばれ、我身を忘れ、我儘を棄て、相慰め、相凌ぐ心がなくては、とても〳〵堪へられるものでない。

所が自分等は今迄如何であつた。夫として、果して善く婦を愛して居たであらうか。婦として、果して善く夫に從つて居たであらうか。舅姑に對しては如何であつた。小舅小姑に對しては如何であつた。

（二）貞節を守らねばならぬ。夫婦互に手を握つて婚姻を結び了ると、司祭は指環を祝別して、先づ之を夫に渡し、夫は之を婦の指に箝めてやる。指環は昔しは印判として使つたもので、司祭が之を夫に渡すのは、「之を以て汝の心に封印して、此婦の生存へて居る間は、如何なる婦人にでも心を傾けな」と諭すので、夫が之を婦の指に箝めてやるのは、「汝は今日より我婦である。我が生存へてる間は、如

何なる男にでも心の戸を開けてはならぬぞよ」と云ふ意を表はすのである。

されば一旦結婚した以上は二人一體となるのだから、平生夫婦相思ひ、相親み、夫は婦に對して、婦は夫に對して善く貞節を守り、少しでも身を汚してならぬは勿論、徒な思でも心に浮べてはならないのである。

聖ポーロは曰つたでないか、「夫は妻に負債を果し、妻も亦夫に然すべし、妻は其身の權利を有せずして夫之を有すると共に、夫も亦其身の權利を有せずして妻之を有す。相拒む事なかれ」と。實に夫婦の間には、一個の重大な負債があつて、互に之を支拂はねばならぬ。故なくして之を拒むさへ大罪であるのに、況して之を他の人に拂ふが如きは、實に天主の第六誡に背くのみならず、配偶者に對しても、甚しい不義を働くのである。

されば夫婦たるものは、如何なる場合に臨むとも、夢々心の帶を緩めることなく、惡魔の誘惑にでも遇ひ、良からぬ心でも起る時は、直ぐ指環を打眺めて、結婚の神聖い契約を思ひ起すことにせねばならぬ。

然るに自分等は之に就て如何であつた。一寸でも貞節を破るやうな事はなかつたらうか。

(三)、子女を立派に育て上げねばならぬ。婚姻の目的は子女を擧げ

て、之を公教の旨に從つて教育するにあるのだから。夫婦となるにも、爲つてからも、之を第一の目的とし、假りにも子女の出産を妨げるやうなことを爲てはならぬ。

子女が生れたら、直に洗禮の聖恩を蒙らする手數をし、それから と云ふものは、朝も晩も、子女の保護の聖人を傳達として、子女の上に天主の祝福を祈らねばならぬ。

懷に抱いて居る頃から、十字架の印を習はせ、耶蘇、マリア、保護の聖人などの聖名を教へて之に祈らせ、主禱文・天使祝詞、使徒信經、痛悔の祈禱なども諳記じさすべし。

成長するに隨つて、公教要理の稽古に出し、初告白、初聖体、堅

振の秘蹟も夫れ〳〵立派に準備して拜領させ、毎年其等の紀念日と保護の聖人の祝日とには、告白、聖体の秘蹟を授らせ、平日よりも幾らか異つた食物でも與へ、幾らか異つた衣服でも着せて、紀念日は是非祝ふべきものだ」と云ふ感を、深く子女の腦裡に染み込ませねばならぬ。

朝夕の祈禱、コンタス、默想、ミサ拜聽、聖体拜領、靈的讀書なども、幼少の頃から習慣をつけてやり、聖人等の平生口にして居られた罪を犯さんより死ぬのが增しだ。タトヒ全世界を掌にすると も、靈魂を失はゞ何の益がある。現世の物は皆な終る。たゞ來世だけは終を知らない。たとひ世界中の財寶を失ふとも天主を失ふな」

と云ふ樣な格言を、口癖のやうに謂つて聽かせねばならぬ。

唯だ口で敎へるばかりでは足りない、自分で行て見せねばならぬ。親が祈禱をせず、ミサにも往かず、秘蹟にも近接かずしては、到底子女ばかりがそれを爲る筈はない。自分では親を愛せず、夫婦喧嘩をし、人を誹り、惡口を叩いて見せながら、子女にばかりそれを禁じた所で、何の甲斐があらう。

終に親は子女を懲さねばならぬ。時としては鞭を執つて、食物を與へないで、衣物を取り上げて、以て其子の惡癖を矯正してやる義務がある。愛に溺れて、我子を折檻しさらぬ親は、愛するのでない、憎むのである。「可愛い兒は棒で育てよ」と曰ふでないか。

サテ〳〵自分等は今迄親の務に就て如何であつた。怠りはなかつたらうか。自分等の怠り故に、子女は善に遠かり、惡に流れ、天主の聖意を痛め、人の躓ともなる如なことはなからうか。

今恭しく、聖母の聖像の前に拜跪き、イエズス、マリア、ヨゼフの聖家の光景を想ひ廻いさう。あゝナザレトの聖家に於て、マリアとヨゼフとは如何に相愛し、相扶け、相共に祈り、相共に働き、又御子の耶蘇に對して、如何に善く親の務を盡し給ふのであつたよ。自分等も之を鑑として、屢々「聖族に對し奉る祈禱」を誦へて、其御助力を乞ひ求め、自分等の家が、ナザレトの聖家の如くなることを出來るやう努めねばならぬ。

之を行へ、然ちば汝活くることを得ん、

（ルカ傳十章二十八節）

基督信者の要務　大尾

明治四十四年六月十二日印刷
明治四十四年六月十五日發行

長崎市南山手町乙二十八番地
編輯兼發行者　浦川和三郎

大阪市東區左官町五百二十四番地
印刷人　杉山國司

同所
印刷所　聖若瑟教育院活版部

長崎市南山手町乙一番地
發行所　天主堂

正誤

頁	行	誤	正
三	三	藝題	藝題
一七	四	フラスン	フランス
二九	九	事が	事、
三七	九	問題を	問題が
五二	一	合せ	合せ
五六	十	見たらば	見たらば
八七	三	海の深に	海の深に
八九	五	酔ふものは	酔ふもの、
一一五	六	行狀	行狀
一二二	九	忙しく、	忙しくて
一四二	三	聖人等	聖人等
一四二	三	心	心
一六二	三	等閑	等閑

頁	行	誤	正
一九七	五	奪闘	舊闘
二〇〇	五	優てれ	優れて
二一六	二	非ずて	非ずして
二一七	五	或等、	我等
二三三	四	疑	疑
二三三	七	鐘愛	鍾愛
二四一	七	悪解	悪解
二五六	七	明	明
二七〇	一	愧し	愧し
二七五	六	のでもなけば	のでもなければ
三一一	八	濟し、	濟し
三一九	九	知らぬ	知られぬ
三二二	十	分	自分

三二三　二　こしん 徳自身
三二四　八　ぬき 抜き
三二五　一　はなれい 離れい
三三五　八　たまもの 賜
三五九　九　こし 底の知られぬ
三六一　八　まぼしめし なられらう
三六九　八　しか 忠召
三七一　二　かくと 確と
三七二　九　ずいぶん 隨分
三七二　九　かういふ 彼云ふ
三七四　五　くびま 聖リマア
三八五　九　ところ 首の
三九八　四　やう 所も
四一一　二　しまなが 樣して
四三〇　二　るてん 流謫

四六四　六　ちから 曰つて
四七九　九　だいたい 權威
五一〇　三　だいきい 大罪
五七七　二　ないさい 案内されたる時
六〇八　五　ここ 何處でも
六一一　三　くだ 下さ
六一三　六　かへつ 却て
六五三　一　かたむ 傷け
六五六　四　おもひ 思ひ

こしん 御自身
ぬき 抜き
はなれい 離れまい
たまもの 賜
こし 底ひ知られぬ
あはめし なられよう
しか 思召
かくと 確と
ずいぶん 隨分
かういふ 彼云ふ
くびま 聖マリア
ところ 首の
やう 所が
しまなが 樣にして
るてん 流謫

いつた 曰つた
ちから 權威
だいきい 大罪
ないさい 案内される時
ここ 何處でも
くだ 下さ
かへつ 却て
かたむ 傾け
おもひ 思ひ

廣告

公教家庭叢書　續刊

第三篇　聖体訪問　（起稿中）

以下未定

書籍定價表

善終の準備	四六版	拾八錢 郵税六錢
未來の希望	菊版半截形	七錢 郵税貳錢
聖体拜領辯	袖珍形	五錢 郵税貳錢
天主公教會聖歌	菊版	六拾錢 郵税八錢
聖心聖月	袖珍形	六錢上製拾錢 郵税貳錢
聖母月	同	拾錢上製拾五錢 郵税貳錢
罪源征伐	同	貳拾錢上製貳拾五錢 郵税四錢
花ちる里	四六版	八錢 郵税貳錢
忘れがたみ	四六版	八錢 郵税貳錢
ろざりよ小解	袖珍小形	四錢
聖言百紀	同	參錢
愛主金言	同	貳錢

大阪市東區玉造紀伊國町
聖若瑟教育院

東京市神田區錦町一丁目
取次販賣所　三才社